

徐弘祖の地理・地学思想初探

—地の「脈」の説を中心に—

薄井俊 二

埼玉大学教育学部言語文化講座国語分野

キーワード：徐弘祖、徐霞客、地の「脈」

一 はじめに—問題の所在、徐弘祖の地理・地学思想の評価

明代の士人である徐弘祖は、日本ではあまり知られてはいないが⁽¹⁾、大陸中国では、歴史の教科書に記載されるほど著名な人物である⁽²⁾。彼は中国各地を遊歴し、日記体の詳細な見聞記録「徐霞客遊記」(以下「遊記」)を残しており、旅行家・地理学家とされる。そして学術的には、その客観性・科学性について高く評価されている。

例えば、唐錫仁等主編『中国科学技术史 地学卷』では、「本草綱目」の李自珍、「稟律全書」の朱載堉、「幾何原本」「農政全書」の徐光啓、「天工開物」宋応星とならべて、徐弘祖を「当時の五大科学家」と評する⁽³⁾。また彼の残した「遊記」の地理学的貢献として五点をあげるが、その一つの「岩溶地貌」では、徐弘祖が数多くのカールスト洞穴に実際に入り、洞穴の位置や形、洞口の向き等について、客観的な記述と分析を行っていることを評価し、「中国古代における系統的岩溶地貌研究の先駆」「世界的な岩溶学と洞穴学の先駆者」

とし、彼の先見性を高く評価する⁽⁴⁾。また貢献の二つ目「河流水文」では、長江の源について、儒教経書が聖典視されていた当時にあつて、「尚書」禹貢の「岷山」説にとらわれず、実地調査に基づく客観的な考察に基づいて結論を出していることを評価している⁽⁵⁾。

確かに、徐弘祖の著述には、地理的事象を客観的に観察分析し、その生成要因を導き出そうとする「科学的」な思考が見受けられる。(華頂峯の)絶頂に登る。荒草靡靡たり。……嶺角(山麓)には山花盛んに開くも、頂上には反つて色を吐かず。蓋し高寒の勒ふるところなり。…遊天台山日記⁽⁶⁾ 四月三日条

右は、天台山における花の開花状況を述べたものだが、山麓では花が盛んに咲いているのに、山頂では花が開いていないことを観察した上で、それは山頂の標高が高く、寒冷なためだろうと推測している。

また上ること二里にして、則ち峯脊は冰塊枝に満つ。寒氣の結ぶ所なり。大なる者は拳の如く、小なる者は蛋の如し。枝に依りて成り、風に遇ひて墜ち、俱に堆積して地に満つ。……蓋

し第二重の頂は、風に当りて樹を舞はず。故に氷は止だ枝に随ひて堆積す。而して（紫雲）菴は山の環り峯の夾むに中り、竹樹蒙茸たり。縈霧氷を成し、玲瓏樹に満つること、瓊花瑤谷の如し。朔風之を揺らすこと、步搖玉珮の如く、声金石に叶ふ。偶々振して地に墜つること、玉山の頽るるが如し。積むこと高さ二三尺なる者有り。…「楚遊日記」正月一四日条

右は紫雲山における樹氷を観察したものである。第二重の山頂では、樹氷は枝の先に氷結を結び、落下した氷塊は枝の形に沿って堆積している。しかし、紫雲庵附近では、樹木全体が樹氷に覆われ、氷塊の落下も山が崩れるような大規模なものである。その違いは、山頂では、風が樹木を揺らすため、氷結が枝先にしかできないが、紫雲庵附近は山々に囲まれていて風が直接当たらず、立ちこめる霧が樹氷を形成するので氷塊が大きくなるのだとする。樹氷と落下する氷塊の大小を、樹氷が生える地理的条件によって比較分析している。徐弘祖がこうした「科学的」な思考力を有しており、分析的な記述をしたことは間違いない⁷⁾。

しかし、先に見た大陸中国における徐弘祖評価の方法は、現在われわれが共有しているところの、西洋近代科学思想史の成果や視点を物差しとしたものであるといえる。洞穴や河川といった地理・地学的な事象について、西洋近代科学思想の成果を歴史的に並べ、その史上に徐弘祖を位置づけて、彼の先駆性・先見性を高評価しようというものである。また先に見た洞穴と河川についても、それぞれ別々のものとして捉えていた、という前提で評価を行っている。

しかし彼の著述には、西洋文明に基づく知識に直接的な影響を受けた形跡は見られない⁸⁾。その読書対象も中国古典籍であり、彼自

身も、もっぱら伝統中国文化の中にあつた知識人であつた。そうであれば、徐弘祖の思想を研究・評価する場合にも、西洋近代科学思想史の視点から、個別の事柄を別々に照射するのではなく、伝統中国文化史の中に据えた上で、総合的に見ていくことが必要ではないか。

そこで本稿では、中国独自の伝統文化史の中で、徐弘祖の地理・地学思想を考える手始めとして、「地脈」の考え方に注目したい⁹⁾。

二 徐弘祖とその著述

先ず徐弘祖とその著述について概略を述べておく¹⁰⁾。徐弘祖¹¹⁾、字は振之、号が霞客。万曆一四（一五八六）年生、崇禎一四（一六四一）年没。江蘇省江陰の人。地方の名士の家柄だったが、科擧には応じず、生涯在野の人であつた。しかし、高い教養を持ち、黃道周・錢謙益・陳繼儒といった、一級の文人達と深い交わりを持っていた¹²⁾。

幼いころから地理に興味を抱き、中国国内を遊歴することが一七回を数え、その多くで旅日記を残している。これが「徐霞客遊記」一〇巻である¹³⁾。現存するのは、約六〇万字。内容は、万曆四一（一六一三）年の「遊天台山日記」から崇禎六（一六三三）年の「遊恒山日記」に至る一六回の記録が、「名山遊記」として巻一。同九（一六三六）年から同二三（一六四〇）年に至る、中国西南部遊歴が「西南遊日記」として、巻二から巻一〇までを占める。山川遊記の定番である、名勝を訪れての文学的な「詩文」はほとんどなく、自然地形や人文地理的な事柄についての、客観的な観察と描写に終始している。

徐弘祖の著述には、「遊記」の他に、長江の江源を考察した「溯江紀源」他一篇の短い論説文がある¹⁴。彼の思想を読み取る素材としては、「遊記」と論説文が第一次的資料であり、死後に書かれた伝記や序跋が第二次資料となる。

三 徐弘祖における、大地の「脈」の説

三―一 水脈と山脈

清儒の潘耒（一六四六―一七〇八年）は、その序文の中で、「遊記」の記述の仕方について、次のように言う¹⁵。

先ず山脈の如何にして去来するか、水脈の如何にして分合するかを審らかに視る。

山脈と水脈の去来と分合が、地理的な形勢についての、徐弘祖の関心事だったという。確かに遊記を見ると、山脈と水脈の記述が随所に見られる。

天台の溪は、余の見る所のものは、正東を水母溪となす。察嶺の東北、華頂の南に分水嶺有り。甚しくは高からず。西流を石梁となす。東に流れて天封を過ぎ、摘星嶺を繞りて東し、松門嶺に出で、寧海によりて海に注ぐ。…「游天台山日記後」三月一八日条

ここでは天台山東部の水母溪について、水源から海に入るまでの流路が記述されている。そして「流」や「注」という記述の仕方から、河川は動かない「線」ではなく、「水」が流れる水脈として捉えていたことが分かる。

蓋し北山は玉壺より西来し、中支は此に至りて尽く。後に復

た一支を生じ、西のかた蘭溪に走る。後支の層の分れて南する者は、一たび環りて龍洞場となり、再たび環りて講堂場となり、三たび環りて玲瓏巖場となる、而して金華の界は、ここにおいて尽く。…「浙遊日記」一〇月一〇日条。

これは浙江金華山の北山系の山脈を記述したものであるが、ここでは山岳や丘陵地を単独のものと捉えずに、連続する「脈」として捉えている。しかも、「一支を生じ」や「蘭溪に走る」とあるように、動的な「脈」としている。

つまり、現在のわれわれが、「山脈」を、山塊が並んだ「静的」なものと捉えているのは異なり、徐弘祖は「動的」なものと捉えているのである。

この点を更に詳しく見てみる。

三―二 水脈と山脈の説―「溯江紀源」より

徐弘祖にとって、水脈と山脈とは、中国の大地をめぐる、動的な筋道であった。それを中国全土レベルで俯瞰したものが「溯江紀源」に見える。そこで本節では、「溯江紀源」から徐弘祖の構想する「地脈」の説を概観する。

(一) 水脈の説

先ず中国を流れる大水脈について、次のように言う。

江河は南北の二経流たり。其の特に海に達するを以てなり。…其の発源を按ずるに、河は崑崙の北よりし、江も亦た崑崙の南よりす。…「溯江紀源」

中国の大地を流れる水脈について、黄河と長江が二本の主流であるとす。そして、その二本の主流はどちらもチベット山塊の崑崙

山（実在の崑崙山）を源として、中国の大地を西から東へ流れていくとする。

さらに黄河と長江という二大河川に、様々な河川が合流、枝分かれをしているとする。

河に入るの水は、省五たり〔陝西山西河南山東南直隸〕^①。

江に入るの水は、省十一たり〔西北は陝西より四川河南湖広南直、西南は雲南より貴州広西広東福建浙江〕。其の吐納を計るに、

江は既に河に倍せり、其の大なること固より宜なり。…同前

ここは黄河に出入する河川と長江に出入する河川とを比較して、流域の広さを省単位で計算し、後者が前者の二倍を超えているという部分だが、「其の吐納を計る」という記述から、二大河川から大小様々な支脈が枝分かれをし、また逆に大小様々な河川が二大河川に合流しているという構図をイメージしていることが分かる。

この「水脈」また「水系」の考えは、現在でも通じるものがある。

（二）山脈（龍脈）の説

その一方、山脈については、現在のそれとはかなり様相を異にしている。

徐弘祖は、黄河と長江とを夾んで、三本の大山脈が西から東へ横たわっているとし、それを「龍脈」と呼んでいる。

今三龍の大勢を詳にす。北龍は河の北を夾み、南龍は江の南を抱く、而して中龍は之を中界す。…同前

更に南龍についてだが、その脈の源は崑崙山だとしている。

惟だ南龍のみ磅礴として宇内に半ばす。而して其の脈も亦た

崑崙に発し、金沙江と相持して南下し、石門麗江を経て、滇池

の南を環りて、普定より貴竺都黎の南界を度り、以て五嶺に趨

る。…同前

ここは南龍の記述だけだが、おそらく三大龍脈の全てが、崑崙山を源とすると考えていたとして間違いなからう。そして、金沙江と平行して「南下」したり、石門と麗江を「経る」というの記述のように、龍脈も、水脈同様「流れる」ものとされている。

そして、それぞれの龍脈から支脈が分かれ、中国の大地を網の目のように覆っているとしている。

南龍は五嶺より東して閩の漁梁に趨り、南に散じて閩省の鼓山となり、東に分れて浙の台宕となる。正脈は北に転じて小箬嶺となり〔閩浙の界〕、草坪駅を度り〔江浙の界〕、峙して浙嶺〔徽浙の界〕黄山〔徽寧の界〕となる。東して叢山関〔績溪建平の界〕に抵り、東に分れて天目武林となる。正脈は北に東壩に度り、峙して句曲となる。是に於いて龍を廻らせて金陵に結び、余脈は東に余が邑に趨る。…同前

ここも南龍の記述だが、他の龍脈も同様に支脈が分かれているとみてよいであろう。

（三）脈を流れる「気」

河川は「水」の流れによつて形成される。これを伝統中国文化の言葉で言い換えれば、河川は「水の気」の流れとして形成されるのであり、水脈は「水の気」が流れている「脈」である、となる。これと同じことが山脈でも言えるのではないか。つまり、山脈は「大地の気」の流れとして形成されるのであって、山脈、また龍脈には「地の気」が流れているのである。

三三三 「遊記」における山脈・龍脈

(一) 龍脈

「湖江紀源」では龍脈を俯瞰的に描いていた。それでは「遊記」においては、どのような記述が見られるのか。

まず、南龍の支脈が通る、浙江と江西の境界地である草坪附近について、「遊記」では次のように言う。

また七里にして、草萍公館たり〔常山玉山兩県の界〕。昔駅有り、今は已に革まる。また西に三里にして、即ち南龍の北に度るの脊なり。其の脈は南のかた江山県二十七都の小箬嶺よりし、西に江西の永豊の東界に転じて、迤邐して此に至る。…「江右遊日記」一〇月一七日条

ここでは、南龍が北に進む様を「脊」として表現し、それがどういう経路を通ってここに到ったかを記述している。いわば、「湖江紀源」が描いた、「氣」が流れるマクロな地脈が、草坪附近というミクロのレベルでどう流れているかを記述しているのである。先に、見た水脈や地脈の記述も、これと同様で、ミクロレベルでの「氣」の流れを、地の「脈」として確認しているのである^[7]。

こうした「龍脈」の記事は、「遊記」、特に、崇禎六年（一六三三）に始まる「西南遊日記」において頻出する。

其の西南は建昌の広昌たり。則ち会仙の南の大山なり。乃ち南龍北来して東に転ずる処なり。…「江右遊日記」一月九日条
橋の西に金鼎山有り。山は老龍の脊たり。此よりして興安に至り、南に海陽に転ず。…「粵西遊日記」四月二三日条

老龍の脊、広順より北し、東して上寨嶺の東を度り、頭目嶺を過ぐ。また東北して龍里の南を、また東して貴定県の西南を

過ぎ、また東して新添衛の杪木寨を過ぎ……以て興安分界に抵る。…「黔遊日記」四月一七日条

南龍の大脈は、麗江の西界よりし、東に走りて文筆峯となる。是れ劍川と麗江との界なり。…「滇遊日記」一月二〇日条

これらの「脈」をつなぎあわせれば、中国全土を覆う大小の地脈である龍脈の全体像が浮かび上がるであろう。つまり「遊記」では、大小の水脈や龍脈の、当該局地における観察記録が記されているのである。「湖江紀源」では、中国全土を俯瞰した、マクロな水脈と地脈を描き、「遊記」ではそれぞれの場面におけるミクロな水脈と地脈が描かれているのである。

(二) 洞穴

「遊記」の特色のひとつが、洞穴にあることは、先に挙げた唐錫仁他の指摘するところである。この点において、異議はない。しかし「遊記」における洞穴は、水脈や地脈と関連するものである。

ここで伝統中国文化における洞穴について概略を述べておく。洞穴は、主に道教において重要な場所だとされてきた。東晋の郭璞は「山海経」に注して次のように言う。

洞庭は地の穴にして、長沙巴陵に在り。呉県の南の太湖の中に菑山有り。山の下に洞庭有り。穴道水底を潜行し、通ぜざる所無しと云ふ。号して地脈となす。…郭璞注「山海経・海内東経」〔正統道蔵 太玄部〕「入洞庭下」条。

ここでは地中にある穴は「地脈」とも呼ばれ、通じ合っていると

さらに梁の陶弘景は、洞穴は洞天という別世界に通じるものであり、句曲茅山の地下洞は通じ合う諸洞天のセンターであるという。

句曲の洞天、東は林屋に通じ、北は岱宗に通じ、西は峨嵋に通じ、南は羅浮に通ず。皆大道なり。…「真誥」稽神枢一（「正統道藏」太玄部）

さらに洞天は聖地であり、身を清めたものだけが洞天に至ることができる。洞天では神々と交感し、靈力や靈物を授かることができるとされた。

漢の建安中、左元放、伝者の「江東に此の神山有り」と云ふを聞く。故に江を度りて之を尋ぬ。遂に齋戒すること三月にして乃ち山に登り、乃ち其の門を得。洞虚に入り、陰宮に造る。三君亦た授くるに神芝三種を以てす。…同前

徐弘祖は、こうした道教の洞天説を知識としては知っていた。広西省のある洞穴について次のように言う。

余、先ず宝圭の行を作さんとす。…「粵西遊日記二」八月一日条

ここにいう「宝圭」とは、北流県の勾漏洞のことだが、「宝圭」という名称自体は、唐末の道士である杜光庭の「洞天福地嶽瀆名山記」（「正統道藏」洞玄部）に記載のものである¹⁸。すなわち徐弘祖が道教に関わるこの書を読んでおり、洞天福地説を知っていたことは間違いない。

しかし、徐弘祖は、「諸洞が通じている」「洞穴が神秘的宗教的な場所である」という観点は否定していた。

既に入れば、則ち復た穹然として高遠なり。其の左に石欄の横列する有り、下に陥すること深黒なり。杳として底を見ず。是れ瀨子潭たり。導者の言ふ、「其の淵は深くして海に通ず」と。未だ必ずしも然らざるなり。…「粵西遊日記一」五月二日条

これは桂林の棲霞洞に入洞したときの記録だが、案内人が言う「洞穴が海に通じている」という説、いわゆる「海眼説」を否定している。

是の白石勾漏水月…世に容州の三洞天は俱に潜穴して相ひ通ずと謂ふは、非なり。…「粵西遊日記二」八月九日条

ここでも白石洞勾漏洞水月洞という、容州の三つの洞穴が通じ合っているとする説を否定している。

また湖南省の麻葉洞では、神竜や精怪が棲むとして、洞穴に入るのを止める村人を退け、たいまつを手にして入洞し、探索している。

麻葉洞を得。…初め炬を覓め導を倩やとはんとす。亦た俱に炬を以て応ずるも、而も敢へて導する者無し。曰く「此の中に神龍あり」と。或ひは曰ふ、「此の中に精怪有り。法術有る者に非ざれば、撰服する能わず」と。…余乃ち前村を過よぎり、行李を其の家に寄せ、顧僕と各々束炬を持して入る。…「楚遊日記」正月一七日条

正月一七日条

このように徐弘祖は、道教のような伝統的中国文化において見られた、洞穴の帯びる神秘性や宗教性は、全くこれを否定し、洞穴を自然に形成された存在だと捉えている。しかし、洞穴を「地」における「脈」であることはこれを肯定して受け入れている。

先にあげた金華山における地脈描写は、次のように続いている。

玲瓏巖の西は、また環りて鈕坑となる、則ち蘭溪の東界なり。再び環りて白坑となり、三たび環りて水源洞となる。…「浙遊日記」一〇月一〇日条

ここでは地脈をたどった最終地点に「水源洞」という洞穴が口を開けているとする。つまり、長い洞穴は「氣」が流れる地脈のひとつであり、その末端が洞穴の洞口なのである。

西洋近代科学思想においては、鍾乳洞のような細長い洞穴は、水の流れの侵食作用によって形成されると理解されている。その一方、徐弘祖を含めた中国伝統文化においては、洞穴は「水の気」や「地の気」の流れとして捉えられているといえる。さらに、洞穴の洞口は、地中を流れる「気」が地上へ出る「出口」、また地中へ入る「入口」とされている。先に唐錫仁等は、「遊記」の洞穴記述において、洞口の向きが記されていることを指摘していたが、それを記す理由については述べていなかった。「遊記」が洞口の向きを記録するのは、そこから「気」が出入りすると考えていたことによるのではないか。江西省從姑山の洞穴について、次の記述がある。

從姑山……内に石竇有り。直ちに上ること三丈。正に南隅懸崖の洞と相對す。…「江右遊日記」一月四日条

ここではある洞穴の開いた口が、谷を隔てた崖に穿たれた、別の洞口と相對しているとする。すなわち一方の洞口から出た「気」が、その正面の別の洞口へと入っている、としているのである。このようにぴたりと符合する例はそれほどないが、洞穴が「地脈」の一部であり、洞口はその末端にあつて、地脈を流れる「気」が出入する「口」であると考えられていたことはこの記事からも間違いないだろう⁽¹⁹⁾。

四 風水説との近似性

以上、徐弘祖の「地脈」の考えを見てきたが、これは中国伝統文化のひとつである堪輿家言、すなわち風水説における「脈」の説と近似するものである。風水説については、三浦國雄の『風水講義』⁽²⁰⁾

によって概説する。

『風水講義』は、明代の風水書である「地理人子須知」⁽²¹⁾を解説する形で、風水についてまとめている。それによれば、まず風水とは、「土地、場所」の「吉凶禍福」を判断する占術である。そして大地には「気」が流れているが、特に人間にとってプラスの価値を持つているものを「生氣」といい、その「生氣」が流れる道が「龍脈」もしくは（龍）と呼ばれる。そして龍脈上にとくに生氣が濃密にわたかまっているポイントを「龍穴」もしくは（穴）と呼ぶ。この「龍穴」を探し当てて、そこに墓や家、また都市を営むと繁栄や幸運が訪れるというものである。

三浦は、次いで「地理人子須知」の内容を紹介するが、ここでは、マクロな地理観として、崑崙山を源泉とする三大幹龍が中国を西から東へ横たわり、そこを「生氣」が流れているとする。そして幹龍から大小様々な支龍が派生して、中国全土に張り巡らされてゆき、「生氣」をマイクロのレベルで運ぶのだとしている。

この大龍脈とそこから派生する小龍脈が中国全土を覆うという仕組みは、徐弘祖の説と極めて近似するといえる。

徐弘祖の親しい友人でもあった陳繼儒は、徐弘祖の墓誌銘を書いているが、その中で次のようにいう。

霞客は讖緯術数家の言を喜ばず。…陳繼儒「霞客徐先生墓誌銘」
（「遊記」に附載）

ここにいう「讖緯術数家」とは、地理でいえば風水説であろう。陳繼儒は、徐弘祖は風水説に与しなかつたという。確かに、「遊記」では場所の吉凶については、ほとんど言及がなく興味を示していない。しかしその一方、陳繼儒は次のようにも言う。

星辰の経絡、地気の縈迴においては、みな其の分合淵源のよる所を得。……(徐弘祖)云ふ、「……即ち江河二経、山脈三條」と。…同前

星辰は修辭上のことで、地気が問題だろう。徐弘祖は、地気に分合やその淵源を自ら確認しようとしていたとし、彼自身が二大河川と三大龍脈のことに言及したとする。すなわち、徐弘祖は、選地占いという風水の占卜的側面には賛同しなかったものの、気が大地を流れ龍脈を形成するという風水の自然観・大地観については、これを準用したのだというのである。

五 まとめ

以上、徐弘祖の地理・地学思想について、「地脈」の考え方を中心に考察した。それは、大地を、水脈と同じような地脈(龍脈)が流れているとするものであった。崑崙山を起源として、東流した三大龍脈が中国の大地を流れ、その大龍脈から無数の支脈が分かれ、また合流しながら大地を覆い、最後には東海へと至るというものであった。また各地に見られる洞穴は、そうした「脈」の一種であり、「気の流れ」であった。こうした考えは、堪輿家、すなわち風水説という「術数」に属するものの考え方を継承するものであった。この点で徐弘祖の地理・地学思想は、中国文化の中で伝承されてきた思想を受け継ぎ、発展させたものであるという側面が確認された。しかしこのことは、彼が合理性や科学的思考から遠いところにいたということを意味はしない。むしろ中国文化なりの合理性・科学性を継承発展させたと捉えるべきであろう。

なお、こうした自然観・大地観における風水説、龍脈説の採用は、実は徐弘祖より四〇年程先輩にあたる王士性という人物の著述にも見え、明代後半においてはある程度普遍性を持つていた可能性がある。この点については機会を改めて報告したい⁽²²⁾。

注

(1) 三木克己の抄訳『世界ノンフィクション全集6』(筑摩書房、一九六〇年)、同「徐宏祖とその遊記」『中国文学論集』(春秋社、一九八〇年)、渡部武「中国明代の旅行家徐霞客の旅と飲食」渡部武神崎宣武編『食の文化フォーラム20 旅と食』(ドメス出版、二〇〇二年)、河内利治「明末文人交友考―徐霞客と黄道周」『筑波中国文化論叢』(九号、一九八九年)がある程度。他には後述するものも含め、拙稿が『埼玉大学紀要(教育学部)』にある。なお武田泰淳の未発表小説「霞客」が、雑誌『海』一九九九年七月号に掲載された。その記事では、昭和四四年頃の作ではないかという。そうだとすれば、この泰淳の一文は、徐弘祖を本格的に取り上げた、日本で最も古いものとなる。

(2) 例えば、『看版図学中国歴史』(中国地図出版社、二〇一三年)という歴史地図資料集があるが、その第二十章第八節「明朝的諸子百家」において、鄭和・李自珍・宋応星等と並んで徐弘祖が取り上げられている。

(3) 唐錫仁楊文衡主編『中国科学技術史 地学巻』(科学出版社、二〇〇〇年)「第八章明代第三節王士性・徐霞客对地学的貢献 二 徐霞客与《徐霞客遊記》」、三九八頁。

(4) 前掲注(3)、三九九〜四〇〇頁。また唐錫仁楊文衡『徐霞客及其遊記研究』(中国社会科学出版社、一九八七年)では、徐弘祖は、熱帯カルストの考察において、オランダ人F・F・W・ユングフーンの「ジャワの地形学と科学的調査旅行」(一八四五年)より二〇八年先行、鍾乳石や石筍の考察において、ロシア人M・ロモノソフ『論地層』(一七

六三年)より八二年先行しているとして高く評価する。

- (5) 前掲注(3)、四〇〇〜四〇一頁。
- (6) 「遊記」巻一所収。以下「〇〇日記」とする引用は、総て「遊記」からのもの。「遊記」のテキストは、褚紹唐貞応寿整理本(上海古籍出版社、一九八〇年)が最も良く、本稿もこれによる。
- (7) 徐弘祖の「科学性」は、前掲(2)(3)であげる他の書籍や人物に見られる、明代思想の一面である。「合理性の尊重」「実学的性格」と通底するものがある。しかし「遊記」における地理地学的考察は、断片的なものに留まり、体系化されることはなかった。また続く清朝において「遊記」の合理性や実学性を継承発展される動きもなかった。
- (8) この点について、九州中国学会大会において質問を受けた。改めて先行研究等を調べたところ、ごく初期の研究である『徐霞客逝世三〇〇周年記念刊』(のち竺可楨編『地理学家徐霞客』[商務印書館、一九四八年]として刊行)所収の、方豪「徐霞客と西洋教士関係之探索」が、徐弘祖と西洋人宣教師との交わりの可能性を主張していた。しかし、方豪論文は、両者が同じ時期に同じ場所にいた「可能性がある」ことを述べるに留まり、思想的影響関係については何も論じていない。やはり直接的な影響はなかったと見るべきであろう。
- (9) 本稿は、九州中国学会第六八回大会(二〇一七年五月一四日)における口頭発表に加筆修正したものである。
- (10) 徐霞客の家系と生涯については、拙稿「徐霞客遊記訳注稿 資料篇(一)―陳函輝『霞客徐先生墓志銘』」『埼玉大学紀要(教育学部)』(六三卷二号、二〇一四年)参照。
- (11) 諱はもと弘祖だが、清朝後半は乾隆帝の諱を避けて、宏祖と記される。
- (12) 前掲注(3) 河内論文参照。
- (13) 「遊記」のテキストについては、拙稿「徐霞客遊記のテキストについて」『埼玉大学紀要(教育学部)』(六六卷二号、二〇一七年)参照。
- (14) いずれも「遊記」附載。「溯江紀源」については、拙稿「徐霞客遊記訳注稿 散文篇(二)―『溯江紀源』」『埼玉大学紀要(教育学部)』(六

五卷二号、二〇一六年)参照。

- (15) 「遂初堂集」巻七。丁文江整理本「徐霞客遊記」(商務印書館、一九二八年)に初めて附載。前掲注(1)の三木克己は、潘耒の序文をしばしば引き、「潘耒は諸家の中でもっともまじめに遊記を読んだ人というべき」とする。徐弘祖の伝記として最も流布している「徐霞客伝」の撰者である錢謙益は、実は「遊記」を読んではいなかった。「遊記」は、徐弘祖の死後写本の形でのみ僅かに伝えられ、初めての刊行は、その没後一三〇年以上たった乾隆四一年(一七七六)のことであった。「遊記」は明末から清朝前半期にかけては、その存在はほとんど知られなかつたと考えられる。錢謙益の伝記には、疑わしい記述が少なくないことを押さえておく必要がある。
- (16) 「遊記」「溯江紀源」における、徐弘祖の自注を「」で示す。
- (17) こうした、大地に「地脈」を読み取ろうとする記述は、若年より記し続けた「名山遊記」にはあまり見られず、その末尾の、崇禎五(一六三二)年「遊天台山日記後」「遊雁宕山日記後」に至って、初めて山域の水系が詳述される。さらに同六年(一六三三)の「遊五台山日記」においては、簡略ながら水系と地脈が記述されている。そして同九年(一六三六)に始まる「西南遊日記」においては、「地脈」記事が頻出するようになる。「地脈」の考えは、若い頃から抱いていたのだろうが、多くの場所を訪ね、広い視野で地形を眺めた経験を積むことで、確かなものとなり、記述されるようになったものと思われる。
- (18) 「(三十六洞天) 勾漏山、玉闕宝圭洞天、三十里、在容州、有石室丹井。」
- (19) 同様の記述として「更下山而東、仰見北山之半、復有一門南向。計其処、当即前洞光映所通也。」『粵西遊日記二』七月二三日条、等。
- (20) 三浦國雄『風水講義』(文春新書、二〇〇六年)。
- (21) 徐善繼兄弟撰の風水書。初版は嘉靖四五(一五六六)年、万曆二二(一五八四)年に重刊。初版本の刊行は徐弘祖の生に先立つ二〇年で、彼の生前に存在していたことは間違いない。当該書と徐弘祖との影響関係については、その間に王士性という士人が介していると思われる。

即ち『地理人子須知』↓王士性↓徐弘祖』という流れで「龍脈説」が継承されたと判断される。

- (22) 王士性(一五四七〜一五九八)は、浙江臨海の人。万曆五(一五七七)年の進士。地理的著述に、遊記である「五岳遊草」、地理的事象を考察した「広志釋」がある。王士性については拙稿「明代の王士性について」(『埼玉大学紀要(教育学部)』(六七巻一号、二〇一八刊行予定)参照。

【附記】本研究は、JSPS 科研費15K02029の助成を受けたものです。

(二〇一八年三月二六日提出)

(二〇一八年四月五日受理)